



TITLE:

社會の存續

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 社會の存續. 經濟論叢 1920, 10(3): 322-343

ISSUE DATE:

1920-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127640>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第

卷十第

行發日一月三年九正大

## 論 說

消費税に於ける累進課税

法學博士 神戸 正雄

社會の存續

文學士 高田 保馬

鎌倉時代の家族制度(二)

文學博士 三浦 周行

明治の米價調節(五)

法學士 本庄 榮治郎

所得税均等負擔の理想と實現(一)

法學士 汐見 三郎

キヤナンの富の概念に就きて(二完) 法學士 石川 興二

## 時事問題

家賃騰貴と都市計畫

法學博士 戸田 海市

官吏の待遇を論ず

法學博士 小川 郷太郎

國庫制度の改定に就きて

法學士 大森 研造

## 雜 錄

交通機關論の交通論における地位

法學士 小島 昌太郎

米國勞働者家計三十年間

法學博士 河田 嗣郎

岡山藩の開墾策(二完)

黑 正 巖

## 社會の存續

高 田 保 馬

此問題の社會學史上に於ける來歴をまづ一言したい。勿論これは私の初めて捉へた問題ではない。最初にこれを論じたるものは一八九七年に現はれたるジムメルの論文である。<sup>(1)</sup>氏は次に其著社會學に於てこれを補正した。<sup>(2)</sup>その後には私の知る限りで云ふならばたゞエルウツドが Social continuity の題の下にこれと相關聯したる事を述べたる丈である。<sup>(3)</sup>ブウグレもその論文の中に於てこの問題にふれては居るが、別に之を評論したのを聞かぬ。<sup>(4)</sup>要するに此問題に關する有力の文献としては僅にジムメル、エルウツド二氏の所論をあげたいのである。しかしエルウツドのは其議論の中心が「社會的のもの」の存續にあつて社會の存續にはない、從ひて直接私の參考となし得たるものはたゞジムメルある許りである。併しながら氏の所論は頗る創意に富みまた精緻を極めて居る。私の氏から學べる所は此論文の中の著しき部分を占める。たゞ社會の存續の概念をはじめとして以下幾つかの點に於てつまらぬ試みを敢てしてゐるが故に一篇必ずしも無意義のものでもなからうと思ふ。けれども、行論甚だ蕪雜にして思想また未熟の所が多い、切に識者の教を仰ぐ次第である。

### 第一節 社會の存續の意義

一たび成立したる社會は存續する傾向を有する。社會の存續と云ふのは社會の連續的存在の意義である。一たび生れたる生物は生命を持續けてこれを構成する物質が新陳代謝五たび十たび全く新なるに及ぶもなほ依然として同一生物たるを失はない。これと同じく、例へば國家にせよ軍

- (1) Simmel, Comment les formes sociales se maintient. L'année sociologique I.
- (2) Simmel, Sociologie, 1908.
- (3) Ellwood, Introduction to Social Psychology, 1917.
- (4) Bouglé, Qu'est ce que la sociologie, 1901.

隊にせよ、數年乃至數十年毎に其成員は殆ど全く改まるに拘はらず、それは依然として連續的存在を有すると見られるのである。成員全く變じ去りてなほ社會が存續すと考へるが然らば此社會の連續的存在と云ふ事の意義如何。

試みに一の社會から其成員を盡く取り去ると假定せよ、固より其社會の存續と云ふ事は失はれ終る。併しながら成員に減少なしとするも、其間の結合に於てなくなるか、又は全く其性質を變じ去るとせよ、例へば學會の成員間の結合が消滅するか、又は此學問的結合が急に營利上の結合によりて取り代らるゝとせよ、やはり以前の社會の存續は認められないのである。結局社會の存續と云ふ事は二の成分から成る。一は其成員の存續、二は一定の結合の存續即ちこれである。併しながらなほ進みて、此二の存續の意義如何が問題となる。

一社會の成員に何等の變化も無い場合に於ては成員の存續の認めらるゝ事は明白である。併しながら、存續は必ずしも前後に於ける成員の同一をのみ意味するものではない。存續即ち連續的存在は決して變化交替を斥けない、たゞ此變化が一定の限界に止まる事を意味する。即ち一定の時期をとりて見る時變化するものが變化せざるものに比して比較的に微少なる時には連續的存在が認め得られる。生物有機體にありても、新陳代謝は不斷に行はれる、併しながら一時期に於て代謝するものゝ代謝せざるものに對する割合が極めて小なるが故に、其身體が依然存續すと考へら

るのである。此事は一定の結合の存續に就いて見るも亦相同じ。同一の紐帶による結合即ち同一性質の結合が變化せず存在する時には、一定の結合の存續する事云ふまでも無いのであるが、かゝる事柄は稀にのみ存在する、存續の最も確實なりと考へられて居る國家すら、機能の不斷なる増減によりて其結合の性質はたえず變化してゐる。私共が一定の結合が存續すると云ふ事の意義は、よし一定の成員間の結合が其紐帶に變更を來し、從ひて結合の性質を更むる事ありとしても、一時期をとりて考ふる時變化する部分の變化せざる部分に對する割合に對する比が僅少であるに止まる。例へば國家の機能に變化ありとしても、國家の結合紐帶の全部から見て機能の變化に伴ふ紐帶の變化は比較的に僅少である、從ひて、國家の結合そのものは此變化にも拘はらず存續するものと考へられる。此の如く考へ來れば成員の存續にせよ、一定の結合の存續にせよ、それは一時期に於ける變化が比較的に微なる事を意味する、變化するものゝせざるものに對する割合の小なる事を意味する。然れどもこれは短き一時期に就いての事であるからして、長き歲月の間には變化が顯著なる事もあり得る譯である。成員は全然新なるものによりて取替へられ、結合の性質も亦著しく變化する事があつても、なほ此等のものは其間存續したと認められ得ると思ふ。

此の如く、社會の存續と云ふ事は畢竟其成員の存續、一定の結合の存續に外ならぬのである。

併しながら、存續は割合に微なる變化を斥けず、而して此變化も長期を通して集積すれば前述の如く著しき變化となり得るものとすれば、變化の程度如何ほどまでは社會の存續として認められ、從ひてそれ以上を超ゆれば存續せずとして認められるか。これは確に一の問題である。客觀的立場からして即ち科學者としての立場からして云ふならば、此程度如何はよりて定め得べき根據がない。たゞ成員自身の眼には常に一定の標準がある、變化が此標準をこえざる時には社會が存續すると認めて居る。換言すれば、主觀的立場からして云ふならば前述の程度も確定し得らるべきである。

然らば此標準は何であるか、私は之を社會の象徴の存在に覺めたいと思ふ。一たび社會が成立すれば人々は此社會を以て單なる個人の總計以上の一全體として考へる、而も之を全體として考へるに何等かの事象等を以て之を代表せしめるのが常である、此事象は或は具體的事物なる事もあり、或は名稱なる事もあり、或は人物なる事もあり、或は抽象的な事柄である事もあるが、何れにせよ、かゝる事象と其社會とが同一不可離のものと考へられる、結局此事象が社會の象徴をなすのである。而して此象徴が依然として存在する間は成員の眼の中に社會が存續する。社會と象徴とが同一不可離のものととして考へられる以上此見方は當然である。之を他の方面から云へば、成員に於ける變化結合の性質に於ける變化も此象徴をして消滅せしめざる場合には社會が存續す

と考へられる。同様に此象徴が存在せざるに至る場合には成員の眼に社會が存續しない、即ち、成員と結合の性質とに於ける變化がかの象徴をして消滅せしめる時は社會の存續が認められない。例へば、一の軍隊は三年乃至五年にして其兵卒は勿論將校も盡く新になるであらう、然るに拘はらず、其存續すると考へられるのは隊の象徴たる軍旗及び兵營が存在するが故である。學校や病院に就いても同様の事が考へられるであらう。一の國家に就いては其國土又は王室の如きものが其象徴として見られる、従ひて此象徴にして亡びざる限り其國家は存續すと考へられるのである。低級の蠻民の氏族に就いて云ふならば其名稱たるトオテムが社會の象徴をなす、此名稱の滅びざる間は氏族もまた滅びない。勿論此象徴の存在と云ふ標徴は決して成員及び結合性質の變化の大小を示すものではない、云ひ代ふれば、此等の變化は大であつても象徴は消滅せざる事があり、變化は小にしてなほ象徴の存在せざる事がある。従ひて成員の意識の中に社會が存續すと考へられると否とは社會の外部から見人の眼に社會が存續すと考へられると否とに必然の聯絡がある譯では無い。社會の主觀的存續とその客觀的存續とは一致する事が事實に於て多いが、二者は自ら別なる事實である。而して、茲に考察の對象として取扱ふものは客觀的立場から見たる社會の存續であつて、主觀的立場から見たるものでは無い、後者が前者の上に影響する事の多いのは後に述べる通りである。

## 第二節 成員の存續

社會の存續が成員の存續及び一定結合の存續と云ふ二の成分から成り立つ事は前に述べたる通りである。然らば此等の各が如何なる過程によりて行はれるか、從ひて如何なる條件に依存するものであるか、これを次ぎ次ぎに吟味したいと思ふ。先づ成員の存續に就いて述べる。

成員の存續は何によりて行はるゝか、云ふまでも無く第一に其補償による。種々なる事情は社會から其成員を消失せしめる、此消失に應じてまた不斷に之を加入せしめる事情がある、かくて特殊の事情なき限り社會は常に其成員の減耗を補償し進みてこれを増加せしめるのを常とする。併しながら、たゞ補償のみによりて成員は存續すと云ひ難き事情がある。例へば一國の人口が今年全部死亡すとせよ、明年同數の出生又は移住ありと假定してもその場合人口の補償こそあれ存續があるとは云はれない。此期間に變化する部分の變化せざる部分に對する割合が極めて多いからである。茲に於て成員の存續は啻に成員の補償の行はるゝのみならず、それが徐々なることに俟つ。然り如何なる種類の社會の成員に就いてもその存續があり得む爲には第一、補償の行はるゝ事を要し、第二、此補償の徐々なる事を要する。

而して成員補償の行はれ得る根本的條件としては出生を擧げ、而して補償の徐々なる條件とし



ては一般的事情の不變を擧げたい。云ふまでも無く社會の成員たる人口は刻々に死亡し行く、ただ此死亡は常に新なる出生によりて補はるゝが故に、國家家族の如き基礎社會たるも學會營利社會の如き派生社會たるを問はず、新なる成員を吸収し得るのである。而して此出生に關しては所謂人口の法則の行はるゝ事勿論である。従ひて或種の社會に就いては、出生によりて單に成員の補償の行はるゝのみならず、其増加の行はるゝのを常とする。基礎社會たるも派生社會たるを問はず、中には出生その事が一定の社會への所屬を定むるものがある。國家、家族、教會の如きはこれである。かゝる社會にして而も不斷に分裂の行はるゝ事家族の如くならざるものにありては、人口の増加が原則的事實である結果として、成員に補償の行はるゝのみならず、たえず其増加が認めらる。併しながら此増加は成員の存續を妨ぐるものでは無い。蓋し、一方此増加の割合は極めて遅々たるものであるのみならず、他方よし急激なる場合を假定しても、出生によりて生るゝものは以前から存在したるものゝ部分として考へらるゝのを常とするからである。出生その事によりて一定の社會への所屬の決定せられざるものにありては、人口の法則の必然の結果として成員の補償以上に其増加ありとは斷定せられ難い。自ら他の事情が此點を決定する。併しながら如何なる社會にありても成員補償の行はれうる根本條件が出生にある事だけは確實である。

次に此補償が除々にのみ行はれる事を説明したい。その條件として私は一般的事情の不變を擧

げた。これは地理的生理的及び社會的事情の略ば不變なる事を指したのである。先づ出生によりて直に補償の行はれる社會例へば前述の國家教會などに就いて考へる。年々の死亡年々の出生の率は一定の社會に就いて略ば一定して居る。これは其社會の成員の死亡出生を決定する一般的事情が不變であるが故に外ならぬ、勿論偶然的なる事情が此上に加はりて作用するけれども此作用は大抵相殺せらるゝが故に年々の死亡と出生とは重に此一般的事情によりて決定せられ、其不變なる結果として出生率死亡率共に一定するのである。若しかの一般的事情にして變化する事著しければ一時に多數の死亡と出生とを生じ、成員の補償も急激ならざるを得ないのである。たゞ事實は然らざるが故に年々成員中の或一定部分（文明國について云へば千分の十五乃至二十）が死亡し或一定部分（同千分の二十乃至三十）が出生する。かくて成員の代謝は徐々にのみ行はれ其存續が認められる。出生死亡以外の事情によりて代謝の行はれる社會に就いてもまた同様の事が考へられる。一定の社會には常に種々なる事情からして年々幾何かの脱退者を生ずると同時にまた幾何かの加入者を生ずるのを常とする。此二者の數は必ずしも相等しくはないであらうが、此の如くにして代謝の行はれるのは事實である。而して、此社會を存立せしめたる一般的事情特に社會的事情に甚だしき變化なき限り、此年々の代謝の數は、死亡率出生率に見たるが如く、全成員の數に比して僅少なるを常とするのみならず、常に略ば一定せるものである。一定して僅少なる限り

此代謝は必ず徐々なるものであり、従ひてこゝにも成員の存續が認められる。例へば一政黨に就いて見るに、一般的事情の特別なる變化無き限り年々の退會率入會率は一定してゐる、のみならず、此率は決して著しく大なるものではない、かくて代謝補償も極めて徐々なるを得此政黨の存續も可能である。以上、社會成員の代謝即ち、補償を眼中に置いて論じた。成員の増加はたゞ其社會の生長膨脹と見られる以上、如何に急激なるも社會の存續には妨げない。それは何れともあれ、補償の徐々なるはたゞ社會を支配する一般的事情の不變なるによる事が明にせられたと思ふ。

以上、成員存續の條件を述べたるが、次に此等の條件の下に、種々なる社會成員の存續が如何にして行はれるかを略説したい。先づ基礎社會に就いて考へる。地縁や血縁に基く社會にありては、人々は出生によりて當然一定の社會に屬する、云はゞ人々は其社會の中に生れるのである。従ひて彼等に其所屬社會を選択する自由は無い。勿論此等の社會に於ける成員の補償は直接に出生によりてのみ行はるゝとは云へない。一方に於て、養子又はトオテムの採用と云ふ如き人爲的血縁の構成、他方に於て移住によりてもまた行はれる。又新に生れ出づるものゝ屬すべき氏族が偶然の事情によりて決定せらるゝ場合も、低級の社會に於て乏しくはない。併しこれらの道行によりて一定の社會に入れるものも對社會の關係に於ては社會の中に生れたるものと變りはない。此種の社會にありては成員の消失が主に死亡によるのであるが、なほ其他移住及び人爲的血縁の構成に

負ふ事は明である。而して出生死亡による成員の代謝は前述の如く徐々にしてまた割合に其數小であり、移住や人爲的血縁による代謝の全成員に對する割合も亦微であるのを常とする。これ基礎社會の成員が原則として存續する所以である。而して、代謝が死亡出生による場合には同一血液の連續的存在としてまで考へらるゝが故に、前述の如く成員の存續は更に新なる意義を加へるのである。

此出生による補償過程と正に相對立するものは基礎社會以外の社會に普通なる補償過程であつて、成員の意志によるもの、云はゞ有意的のものである。類似を中心として成り立つ職業、宗教、學問、藝術上の諸結社や、利害を中心として成り立つ諸の會社、團體に至るまで、其成員は不斷に種々なる事情の爲に自己の意志によりて脱退する傍ら、新にまた自己の意志によりて加入するものがある。結局一々の社會を中核として一の雰圍氣が形成せられ、後者と前者との間に不斷なる出入の流が作られる。雰圍氣は或事情の刺激によりて中核たる社會の中に入る傾向ある人から成り立つ。たゞ一般的事情の不變なる以上は常に此雰圍氣中から一定の率をもて中核たる社會に入りこみ、また中核たる社會から一定の率をもて歸り來るのである。出入共に個人の意志によりて決定はせらるゝが其率は一定し従ひて徐々である爲に成員の存續がある。此場合にありては成員の補償と其根本條件たる出生との關係が極めて間接である。

併しながら派生社會に於ける成員の補償はたゞにかゝるものゝみでは無い。原則的ではないが、なほ外に三種の過程がある。其一は即ち出生による補償である。社會の團結が愈々緊密を加ふる時、而して成員の著しき活動を包含するに至る時、人々は社會の外に生れずして社會の中に生れる。既に出生が彼の屬すべき社會を必然的に決定する。歐洲中世に於ける宗教團體、又は職業上の組合は其例である。これ等は社會への加入又は脱退の自由が極限までに減少したる場合として見るべきものである。宗教團體の如き精神的文化を中心とする結社にありては脱退の自由を束縛せむとして、職業組合の或ものゝ如き物質的利益を中心とする結社にありては加入の自由を束縛せむとして、此出生による補償を行つて居る。其二は有意的なる補償ではあるが、出生による補償に伴ふ所の或性質を加味したるものである。出生による補償にありては反覆して述べたるが如く、血液の繼續的存在、又は同一個人の部分の引つゞき存續すと云ふ意識を伴ふ、子は親と同一の血液を有し、又は子は親の一部分であるを考へらるゝが故である。故に出生による補償の行はれる場合にありては社會の成員が全體として存續すと考へられるのみならず、成員自身が一々個人として存續すると認める、成員の存續は客觀的であるのみならず、また必然に主觀的である。此特徴が例へば法燈の相傳、俠客の結合等の場合には人爲的に構成せられる。今日僧侶となり俠客となる事は個人の意志によりて決定し得べき事である。併しながら、一たび此社會の中に入る

時には何人かと特別の法縁又は親子分の縁を結ばなければならぬ、而して此縁つゞきによりて彼等は一種の假想的血縁に立つ、一人の死亡に對する補償は其縁者によりて準備せられ、從ひて團體全體の成員の存續あるのみならず、一々の個人の存續があると考へられて居る。所謂成員の存續は此場合主觀的にも認め得られるのである。最後に其三として舉ぐべきものは計劃による補償である。補償が出生によるに非ず、個人の有意的活動に委せられるのも無い、或人の意志而して多くは大抵結社以外に立ちて權力を有するものゝ意志によりてなされたる計劃に従ひて行はれる。而して此場合常に或程度の強制を伴ふのが常である。軍隊や、學校、監獄などに於ける成員の代謝と補償とは常に此種類のものに屬する。派生社會に於ける成員の存續には此の如く三種の異なる過程が混入してはゐるが、それは比較的に本質的ならざるものである。而して社會の段階のなほ幼稚なる時に生じ易き現象である。從ひて社會の發達するに伴ひて、此等の過程は漸次に消失すべき運命を有するであらう。而して成員の存續が基礎社會にありては重に出生によるに對し、派生社會にありては殆んど全く有意的に行はるゝ事となるであらう。

## 第二節 結合の存續

私は成員の存續を説明したるが故に、此上に作用して社會の存續を仕上ぐる所の一定の結合の

存續を説明しなければならぬ。此存續が如何なる部分的過程によりて行はれるかを述べ延いては其條件を明にしなければならぬ。

一定の結合を存續せしめるのに、換言すれば一定の社會紐帶を存續せしめるのに、缺ぐべからざる非社會的なる、云はゞ根本的なる條件がある。これなくしては結合の存續と云ふ事も到底考へ得られない、これは恰も成員の存續に對して出生が有したるが如き意義を此場合に有するものである。此根本的條件として挙げむとするものは遺傳と一般物的外圍の固定との二に外ならぬ。勿論結合の存續は決して之のみによりて行はれるものでは無く、更に社會的條件の作用を必要とするのである、成員の存續がありとするも、成員相互の關係が補償によりて變動する時には一定の結合の存續が困難となる、従ひて此相互關係を極小ならしめる事は結合存續の爲に不可缺の事である。而して之を極小ならしめるに先づ代謝する人々をして著しく類似せしめなければならぬ。遺傳は實に此類似を保障するものである。種々なる社會的事情が相互の類似を作り上げる上に於て重大なる役目を營むにしても、其根本の基礎を供給するものは即ち遺傳である事疑ふべくもない。次に考ふべきは、一般物的外圍の固定である。これは二の意味に於て結合の存續の條件をなす。成員が補償によりて代謝したると否とに拘はらず、彼等の相互關係に變動なからしめむとせば一方に成員自身の屬性に變化少なからしめなければならぬ。云はゞなるべく自己同一ならしめなければ

ならぬ。これが爲には成員の遺傳質の上に作用して其心理的生理的屬性を形成する物的外圍の不變を必要とする。更にまたよし成員の屬性に變化乏しからしめるとしても、其適應すべき外圍の變化は當然に相互の關係を攪亂するであらう、社會的なる外圍（こゝには人的及び精神的外圍をさす）に就いては何れ後に詳述する。物的外圍のみに就いて見れば、それが比較的に固定的であるが故に、現在見るが如く、成員相互の關係が激變なくして維持せられるのである。勿論人は物的外圍に對する單純の服従者では無い、彼は此外圍の上に反動し不斷に之を改造して自己に従屬せしめると説かれる。併しながら、物的外圍の總體から觀察するならば、人力を以て變改せられる部分は極めて微小のものである、幾萬年の努力にも拘はらず一分間だも天候を左右する事能はず、潮流を支配する事も出来ぬ。社會存續の意識せられざる根本條件は此自然の不變性に潜むのである。變改せられたる部分即ち人間が其經濟の中に取り込むたる物質のみを考察すれば云ふまでもなく著しい變化がある、而して人々の相互關係が之によりて割合に顯著の變動を蒙る事も之を認めなければなるまい。これが唯物史觀の所説の根據をなすものである。併しながら此部分に於ける變化もたゞ短き一時期をされば普通徐々たるを免れぬ、著しき變化は此徐々たるもの、集積の結果である。而して此徐々たる限りに於てこれが影響を蒙る所の人々の相互關係の變化も遅々たるものである。これまた一定の結合の存續の見えざる條件をなしてゐる。



併しながら一定の結合の存續にとりてこれ等は極めて根本的従ひて間接的の條件に過ぎぬ。直接に結合そのものを存續せしめる所の條件は社會そのもの、中にあり、従ひて結合の存續過程は此條件によりて決定せられて居る。然らば、社會そのもの、中にある結合存續の條件は何であるか、私は三のものを挙げたい。一は社會意識、二は社會組織、而して三は社會の客觀化と之に伴ふ其象徴の構成これである。

最初に社會意識の作用による結合存續の過程を説かなければならぬ。社會意識の此點に於ける作用は二の方向を有する。一は成員の統制であり、他は其同化である。社會意識の内容がすべて成員の上に拘束力を有する事、而して其内容が多くは社會の結束を以て目的となすものである事は他の機會に既に之を述べた。此統制によりて一たび形成せられたる團結の維持せられ固定せらるゝ事は理解するに難くない。然れども、これよりも其成員の同化作用は結合の存續と云ふ點から見て更に重要な意義を有すると思ふ。蓋し、此同化作用さへ行はるゝ時は成員間の結合は自ら支持せらるゝ事を得るからである。而して此同化は成員の存續即ち其代謝の徐々なる事と密接なる關係を保つ。新に一の社會に入り來る成員が既存の成員と相同化する事なしとせよ、而して代謝が常に異質を生ずと假定せよ、社會の統一は早晚失はれるであらう。而も此同化もたゞ代謝の徐々なるが故にのみ行はれ得る。成員の變化は一定の期間をとりて考ふるに全體の極めて一部分

である、他の大部分は社會意識の支持者であるが故に此新入分子を同化する事が出来る。次の期間に於て一部分はまた交代する、此前の新入分子ははや社會意識の支持者として此度の新入分子を同化せしめるのに作用する。かくて、社會の成員は全然代謝したることも社會意識は依然として不斷に成員を同化する事によりて存續し得るのである。若し成員の存續にしなければ、而して急激にまた一時に過半の成員が代謝するとせよ。社會意識が成員を同化する事は一般に不可能である、強制的權力の作用あるに非ざれば不可能である。而して學校の校風、軍隊精神、土地の氣風など云ふもの皆如上の過程によりて存續する。或は人ありて説くであらう、社會の同質性の存續はたゞ模倣の作用あれば足る、何ぞ社會意識の作用を俟たむと。併しながら、これは許し難き議論である。拘束力を伴ふ事なき單純なる模倣の作用は寧ろ社會の異質性を増加する傾向を有するものである、個人の創始が社會の全成員に傳播せざる事が常である以上、發明模倣の自由に委し去りて、社會意識の同化作用の行はれざる事は、相互の差異を著しからしめ、社會の統一を危からしめるに過ぎない。なほ、社會意識の中に含まれる社會の存續即ち自己維持の意識的努力に就いては社會組織に聯絡せしめて説きたい。

次に社會組織もまた結合の存續の有力なる一條件をなす。其作用も略ぼ二の方向に存すと認め得べきである。第一はその不斷なる統制の作用である、此統制は常に成員の自由なる活動を拘束し

指導して社會の統一を障礙せずまた之を助長する方針をとらしめる。かくて一定の結合を保持し保續せしめる點に於ては社會意識の統制作用と頗る趣を同じくしてゐる。併しながら他の作用に關しては二の條件の意義全く相異なる。社會組織は社會意識の如く直接に成員の同化を生ずるものではない、寧ろ或程度までは成員の差異を必然ならしめ之を助長すと見るべきである、蓋し組織は分業を伴ふのを常とするからである。然らばそれが結合を存續せしめる他の作用は何れの點に存するか。答へて云ふ、たゞ組織の固定の一事に存する。社會の組織は他の機會に於て述べたるが如く社會の意識の内容として存立し、而して此内容は一般に固定的性質を帯びるに至るものであるが、之を離れて考ふるもなほ、組織が本來永續的固定的のものとして作らるゝが故に成員もまた此の如きものとして認むるのみならず、組織の機官と成員との間に存する直接の交渉から成員の之に對する適應が成立する、従ひて成員は其變革を喜ばない。更に重要なものは、組織の機官として役立つものは之を自己の職業として行ふ事である。此事から、彼等は機官そのものを以て一種の自己目的として考へる、其機能の遂行に必要な種々の性質活動は道德的のものに高め上げられると共に、全體の利害の顧慮を失うてまでも其機官の發達を希ふ。こゝに機官そのものの自律性が成立する、此自律性は機官の存在を固定的ならしめ従ひて組織全體を固定的ならしめる。敢て組織そのものが發達せずと云ふのではない、一たび存在するに至れるものが永久に存續

せむとする性質がある事を云ふのである。社會組織が比喩的に社會の骨骼として考へられるのは正にかゝる理由による。さて社會内部に組織がある時は個人相互の關係は概ね此組織によりて決定せられる、又組織によりて營まるゝ機能からして結合の性質も決定せられる所が多い。かくて社會組織の固定は同時にこれ成員相互の結合の一定、紐帶の固定を意味するものと見得られるのである。組織にしてなかつたならば事情の變化の爲に既存の結合の消滅し又は變化し去るべき場合にも、此骨骼の存在は結合そのものを存續せしめる。なほ此點については組織に伴ふ設備、營造物の存續を併せ考へなければならぬ。社會組織が形成せられ種々なる機官が確立する事になれば、其機官の活動を助長する爲に種々なる物質的設備が設けられる。これと社會組織とを併せて社會制度と云ふ事もあり、又は其上に社會意識の内容をも加へて社會制度と云ふ事もあるが、兎に角にかゝる設備が社會制度の名を以てよばれるのは事實である。さてかゝる物質的設備は固定的性質を有する、一たび作られたるものは直に滅びるものではない。病院學校兵營等の設備は皆其一例である。而してかゝる設備の存在は其利用即ち一定の機官の活動を以て當然なかるべからずと思はしめる傾向を生ずる。こゝに社會組織の固定性がかゝる設備によりて助長せられると見るべき理由がある。社會組織を構成する機官とかゝる設備とは相表裏するもの、前者の機能は後者をまちて行はれ後者の效用は前者を俟ちて發揮せられるのであるが、今假に一派の學者に従ひて此

二者を社會の制度の概念の下に總括せよ。然らば前に述べたる提説は次の如くに要約する事が出来るであらう。社會の制度はすべて固定的である、社會の機能は此制度に制約せられるが故に、制度の固定は機能の固定を生じ、従ひて人々相互間の關係をして變化し難からしめる。一定の結合の存續はかくて生じ來るのである。

最後に私は社會の客觀化と其象徴の構成を考へたいと思ふ。これは社會の存續の問題の中最も興味多き部分である。

こゝに客觀と云ひ客觀化と云ふのは別に認識論的乃至は形而上學的意義を有するものではない、たゞ經驗的事實の或る屬性を表示するに外ならぬ。然るに拘はらずかゝる用語を敢てするのは學史上の事情による。此點は姑く措いて、社會の客觀化とは何事を意味するか。主觀即ち成員たる個人を離れて獨立なる性質を社會の得るに至る事を云ふ。社會は個人の結合に過ぎぬ、従ひて個人を離れて社會は無い。併しながら、或事情の下に於ては社會の存在と性質とが一つの個人に依存する事極めて乏しく、各個人から見れば社會が個人を離れて獨立の存在を有し、かへりて個人を支配すとのみ見ゆる事がある。かゝる限度に於て社會は客觀性を有すと見られ、而して形成せられたる社會のかゝる性質を得るに至る事を稱して其客觀化と云ふ。

成立したる社會は如何なる事情の下に於て客觀化せらるゝか。其最も著しき場合は社會の成員

の極めて多數にして相互の直接なる接觸の不可能なる時である。かゝる場合に於ては一々各個人の生滅出入も社會全體の存在に殆ど何等の影響する所はない、所謂社會の個人に依存する所極めて乏しいのである。而して社會は無名性アノニミテイと無人格性イムパソナルナサイとを有する。謂ふ心は、全體としての社會が其の成員たる誰彼とは全くかけ離れて考へられ、従ひて此社會の觀念の中に特定の人々や其名稱の考が入り來らない。所謂對面の社會又は第一次的社會 Primary groups にありては此事なく、よしそれは一集團としての意識を伴ふにしても此集團は誰彼の個人個人に分析して考へ得られるものである。社會の客觀化は此の如く成員の極めて多數なる場合にのみ行はれるものではない。なほ存續の既に久しくして歴史ある結社にありてはよし其人數少なりとするもなほ客觀性を有する。蓋し此社會の有する歴史、組織の如きものが現在の成員たる個人よりは獨立に存立するものであり、又個人の力を以てしては容易に又は到底破壊し難いものがあるからである。なほ此の場合に於ても、若し社會の全體として有する屬性が個人個人の力の中々左右し難きものありと見られる時には客觀性が成立する。例へば、社會が其全體の名に於て遂げたる業績の極めて著大なるものがある場合の如き、即ちこれである。現實に見る社會の客觀化は前述の諸事情の協力によりて行はるゝを常とする。國家、家族、氏族、教會これらのものは皆著しき程度に於て客觀性を有するものであるが、一切の他の社會に就いて此有無を斷言する事は困難である。蓋し此客觀性

は程度概念であるからして種々なる社會は大抵多少の程度に於て之を有し、其間の差別は連續的のものであるからである。

社會が客觀化せられると、此客觀的なる全體と云ふものが成員の意識を支配する。即ち社會の結合はこゝに二つの部分よりなる。即ち一方に於ては成員各個人間の人と人との結合が存在するが他方に於てはまた之と同時に全體的なる社會そのものに向ひて結合する。云はゞ全體としての社會が個人の愛着と感恩との對象となり服従の對象となるのである。勿論全體の社會に對する結合は客觀化なくして行はれずと云ひ難いであらう。併しながら、それが著しき強度と意義とは社會全體が個人から獨立の存在を有する事に俟つ。而して此全體に對する結合が社會の存續に重要な影響を有するものである。此全體的結合は本來個人相互間の結合から派生せられたるものではあるけれども、今や獨立の性質を有し社會の結束の中心的一分子を形づくる。個人相互の間には種々なる事情が生起して其間の結合は消長起伏常なきが普通であらう。此間にありても全體としての社會は個人の外に立ち全成員を結束せしめる中心となる。此種の結合のみは時々事情によりて變動を蒙る事が極めて乏しい。此社會の客觀性はかくて種々なる事情の轉變に抗して社會の存續を保護するものと見なければならぬ。

客觀性を得たる社會は更に進みて象徴を得るに至る。此社會に關係ある何物かゞ特に高調せられて、社會そのものと同一視せられ社會を代表するものであるかに考へられる。成員の客觀化せ

られたる全體に對する情意的態度が此代表たる事象の爲に吸收せられ終るのである。此象徴は前述の如く或は社會の名稱である事もあらう、或は其設備たる物質である事もあらう、或は占有する土地である事もあらう。兎に角に、此象徴に對して成員は社會の全體に對すると同一なる愛着を捧げ又服従を捧げる。これが爲に結合の存續は更に助長せられる所があると思ふ。一方に於て無人稱の無名的にして漠然たる社會全體よりも此象徴に對する方が個人の結合的感情は明確であり、從ひて又力強きものがある、相互の暗示及び傳承によりて強度を加ふる可能も多い。此事實は社會全體の結束を保ち從ひて結合をして破壊力に抵抗せしめるに意義ありと認めざるを得ないのである。然れども更に注意すべきはこの象徴の固定性である。社會の象徴はすべて固定性を有するものであるが、特にそれが物質なる時に著しい、而して此象徴の大部分のものは物質である。社會がよし客觀化せられても、此全體の考が成員の意識に亡び去る時は社會を存續せしむる力は無い。併し此象徴たる事物の存在は永久的である、而して成員の意識の中に社會全體の意識が亡びむとする時でも、之を喚び起して存續せしめる事が出来る。祖國の國土、國の誇となれる名山、神器、建國者の廟社此等のものが國家の團結の存續に如何なる寄與をなしたかは別に説明を要しないであらう。人は忠義、愛國心などが社會の團結を支持すると云ふ、而もこれらの情緒も之を分析すれば其大部分これらの社會の象徴に對する情意内容に外ならぬのである。

(大正九年一月二十三日擲筆)